Japanese Association for Religious Studies

る。アイヌにおいても、復讐が無限の連鎖にいたることはないように思われる。けれども金田一京助採集・訳『アイヌ叙事詩―ユーカラ―』岩波文庫所収の「虎杖丸（いたどりまる）の曲」は、チャシ時代の部族間抗争の復讐劇であり、復讐を無限に連鎖化する要素を抱えている。アイヌにおける道徳の退廃した時代とも云われる所以である。

ロシア思想の終末論的要素の問題について

元春智裕

ロシアを代表する哲学者ニコライ・ベルジャーエフ（一八七四―一九四八）の著作『ロシア理念』（一九四六、邦訳『ロシア思想史』）には「ロシア思想の終末論的要素」という一章が設けられている。終末論的形而上学もしくは霊的終末論を志向するベルジャーエフにとり、自らの思想的源泉をロシア思想史のなかに読み解く試みともいえる。

「ヨハネ黙示録」はロシア人民大衆の間や、作家や思想家などの知識人階級においても大きな役割を果たしてきた。同じキリスト教文化の伝統に根ざしておりながら、終末論の問題が西欧思想よりもロシア思想において計り知れない地歩をしめているのは、ロシア人の意識構造に起因しており、ロシア人の意識構造そのものが、完成された中間文化の形態にほとんど適応せず、またほとんど愛着を感じないためであるという。また、終末論的精神がロシアの教会分裂と宗派活動で演じた役割は小さくない。ロシアの教会分裂では教育の低水準やロシア的反啓蒙主義が少なからぬ役割を演じてきた。反啓蒙主義者の祭礼と儀式に対する尊敬の念がロシア宗教生活の一つの極であるとすれば、もう一つの極は神の真理探究、巡礼の実行、そして熱烈な終末論的意識傾向があった。

ベルジャーエフは『ドストエーフスキイの世界観』（一九二三）の中で「ロシア人は黙示録主義者か虚無主義者である」と述べている。この言葉は、ベルジャーエフ自身が引用するように、例えば文化哲学者のオドヴァルト・シュペングラーが「ロシア人とは古代に対する黙示録的反抗である」と述べるのと相通じる見解であり、ロシア人がその形而上学的本質と世界的召命とに基づいて終末の民であることを意味する。ベルジャーエフは自らの歴史哲学研究のモチーフとして再三、このテーマを取り上げている。

ロシアの宗教哲学的思惟は、とくにカトリック思想に影響されている西欧的思惟よりも終末論的である。したがってロシア的思惟はなおさら歴史哲学の諸問題に興味を示す。ロシアの思想は、十九世紀において、とくに歴史哲学の諸問題を取り上げた。歴史哲学を構成しようと努力するうちに、ロシアの国民意識がつくられていった。ロシアの精神的関心の中心となったものが、スラヴ派と西欧派のあらそいであり、ロシアとヨーロッパ、東と西をめぐっての論争であったことは偶然ではない。チャーダーエフとスラヴ派はロシアの思想をこうした問題に向かわせた。彼らにとっては、ロシアとその歴史的使命のなぞは、実に歴史哲学のなぞであった。宗教的な歴史哲学の形成こそ、

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

ロシアの哲学的思想の本来の使命であるように見える。根源的なロシア思想は終末論的な諸問題に向かい、黙示録的色彩を帯びている。ここにその西欧思想に対して異色をなすものがあり、またこれこそロシア思想になによりも宗教的歴史哲学の性格を与える。

十九世紀末期のロシアでは黙示録的な精神状態が発達した。それは世界の終末と反キリストの出現というような悲観論の色彩を帯びた意識と結びついた。人々は新しいキリスト教の時代や神の国の到来よりも、むしろ反キリストの国の到来を予期していた。ベルジャーエフが当時の終末論的な思想家として注目するのは、ドストエーフスキイ、トルストイ、ウラジミール・ソロヴィヨーフ、フョードロフ、ヘーゲル左派のポーランドの哲学者チュジェフスキーなどである。特にドストエーフスキイはニーチェやキュルケゴールと並んで、十九世紀における悲劇の啓示者である。彼の創作活動は、ただ究極のもの、終末をめざすものだけに関心を持ち、徹頭徹尾終末論的であり、他のいずれのロシア作家よりも予言者的要素が強くみとめられる。

ラインホールド・ニーバーの現実主義

澤井治郎

本発表は、二〇世紀中葉のアメリカにおいて活躍し、現代の最も有名な神学者、あるいは公共の神学者（public theologian）といわれたラインホールド・ニーバー（Reinhold Niebuhr 一八九二―一九七一）の宗教思想の中から、特に彼の思想を特徴づける現実主義を巡る議論を取りあげ、その展開を明らかにしようとするものである。彼は、「キリスト教的現実主義」（Christian realism）というキリスト教神学における思想潮流の代表的人物として知られ、その思想は多くの政治家、政治学者に大きな影響を与えたといわれている。ニーバーは第二次大戦の終結が近づくと、彼の現実主義の立場から、ソ連の共産主義を意識しながら、民主主義の擁護や国際関係における力の均衡論を提唱するようになる。後に対ソ冷戦構造のイデオローグなどと言われるようになるのはその所以である。本発表では、その前段階にあたる初期からの戦時中までの現実主義を巡る議論、さらに彼の「キリスト教現実主義」の根幹を成す彼の人間理解を概観し、彼の現実主義の議論全体を再解釈する足がかりとしたい。

ニーバーによれば現実主義という語の基本的な意味は、特定の確立された基準にとらわれず、社会的、政治的状況のすべての要素を考慮に入れる態度であり、さらには理想主義は社会的な現実に対して幻想を抱いているという批判をも含意するものである。しかしながら、一人の人間が社会的、政治的状況を解釈しようとする際、ほぼ不可避的にその判断基準が媒介するものである。ニーバーの場合、これまでの研究が指摘しているのは、彼の初期の出世作となった『道徳的人間と非道徳的社会』（一九三二年）の頃にはマルクス主義に親和的で革命による社会の変容に多くを期待していたが、主著である『人間の本性とその定め』（全二巻、一九四一―一九四三年）の頃には革命へ

NII-Electronic Library Service